座席位置、情動知能及び自己関連づけ傾向の関係

豊田弘司
（奈良教育大学　学校教育講座（教育心理学））
多根井重晴
（日本薬科大学　薬学部）

Relationships among Seating Position, Emotional Intelligence and Self-reference Tendency

Hiroshi TOYOTA
（Department of School Education, Nara University of Education）
Shigeharu TANEI
（Faculty of Pharmaceutical Sciences, Nihon Pharmaceutical University）

要旨：本研究の目的は，大学生を対象にして、2 席と 3 席が向いあう座席配置の仮想場面における座席選択、情動知能、及び自己関連づけ傾向の関係を検討することであった。また、エゴグラム及び学業成績との関係も検討した。その結果、座席位置と情動知能の関係においては、情動知能のいずれの下位尺度においても座席との関連性は見いだせなかった。しかし、自己関連づけ傾向との関係は，3 席の真ん中の座席を選択した者は他の座席を選択した者よりも自己関連づけ得点の高い傾向が見いだされた。さらに、2 席と 3 席を比較した分析では、エゴグラムの AC 得点に有意傾向差が見いだされ、学業成績との関係でも統計的に有意ではないが、2 席の一方を選択した者が、3 席のいずれかを選択した者よりも学業成績（定期試験得点）の高い可能性がうかがえた。この結果は、座席選択が個人の適応的な特徴を反映し、その適応的な特徴が認知的遂行にも反映される可能性を示唆した。

キーワード：座席位置　seating position
情動知能　emotional intelligence
自己関連づけ傾向　self-reference tendency

1．はじめに

学校教育において教育環境の整備は、重要な課題である。大学教育においてもその課題の重要性は同じであるが、施設の充実面に関しては改善が認められているとはいえ、相変わらず、大きな教室での大人数が実施される場合が少なくない。通常の大学授業では座席は学生が自由に選択できることになっている。そのような座席選択と性格特性との関連に関しては、これまで興味深い研究が発表されてきた。例えば、北川(1980)では、教室の前列や左右中央列の座席を選択する学生には YG 性格検査の理想型とされている情緒安定積極型の多いことが明らかにされている。また、渋谷(1986)は、YG 性格検査で不安定消極型（E 型）の者は大きな講義室では最初に座席を大きく移動し、後に特定の空間の座席に固執することを指摘している。さらに、北川（2003）によれば、教室の左右のゾーンに着席する者は講義を担当する教員に対する心理的葛藤があること、教室の後方の座席に着席する者は授業に対する意欲が乏しいこと、前方の座席に着席する者は授業に対して真面目に取り組む者もしくは講義担当教員との親密度が高い者であることが指摘されている。性格特性の中でもリーダーシップとの関連を検討した Hare & Bales (1963)は有名である。そこでは、長方形卓の短い辺と長い辺の中央の席を選択した者は討議の方向性を支配し、リーダーシップをとる傾向のあることが示されている。また、渋谷（1990）によれば、Howells & Becker (1962)は、初めて会った 5 人に自由に座席を選択してもらうが、机ははさんで 3 つずつ座席が設定されている状況を用意した。5 人であるから 2 席と 3 席にわかれて座ることになり、そこで、あるテーマに関して討論をしてもらい、その後、この討論を方向づけたリーダーが誰であったのかを尋ねた。その結果、2 席のいずれかを選択した者が 3 席のいずれかを選択した者よりもリーダーとされる割合が 2 倍以上高かったのである。本研究においても、この座席配置を仮想場面（以下、上 2 席下 3 席場面）として用いている。

さらに、豊田・井上・多根井（2017）及び多根井・豊田（2017）は、座席位置による相互独立的・協調的自己観（高田,2000, 2011）の違いを明らかにしている。そこでは、長方形卓の長辺に 5 席が向い合って配置され、短辺では 1 席が向かい合って配置されている場面を仮想場面として用いた。そして、長方形卓の短辺に配置された座席を選択する者は他の席を選択する者よりも少ないが、選択した者の独断性は高いことが示されたのである。また、自己概念に

関する研究（Dykman & Reis, 1979 ; Frankel & Barrett, 1971; Stratton, Tekippe & Flick, 1973）によれば、座席位置は、個々の自己概念と関係のあることが示されている。自己概念が肯定的な者は、他者との距離が近くても全く不快を感じないし、むしろ他者との距離が近いことによって自尊感情が高まる可能性もある。

他者との距離は、個人を包む空間としてのパーソナル・スペース（Personal Space ; 以下 PS)によって規定される（豊田・村田・多根井, 2018)。本間(2011）によれば、PS は、Sommer（1969）によって提唱され、いわば、もち運びのできるなわばり空間であり、他人の侵入を許さない個人を取り巻く見えない境界をもつ空間となる。また、渋谷(1990)によれば、PS は前方に広く、両側方から後方にかけては密である玉子型をしている。PS には性差や年齢差があることも知られている（青野, 1979)。さらに、内的統制傾向によっても PS の異なることが示されている（Duke & Nowicki, 1972)。ここでの内的統制傾向とは、Rotter (1966) による統制の所在 (locus of control) によって出来事の原因を自分の能力、性格、努力といった内的な要因に帰属する傾向を指す。PS は相手への視線や距離に反映されるが、Cook（1970）は、相手との親密性によって視線と距離が異なると主張する。すなわち、嫌いな相手には距離をとり、視線を避ける傾向があるが、親密な相手には距離は縮まり、視線を避ける傾向は少なくなる。また、小俣 (1992) は、親しい相手と同席する際には横並びの席、親しくない相手の場合には離れた席が選択されることを示している。

豊田ら（2018）は、座席選択に反映されると考えられる心理的特性として、杉山 (2002, 2004) による被受容感（他者から受け入れられているという感覚）と被拒絶感（他者から拒否されているという感覚）を取り上げ、座席選択との関係を検討した。というのは、相手から受容されていれば、PS が小さくなり、拒絶されれば大きくなると予想できたからである。しかし、本研究で検討する上 2 席下 3 席場面においては座席選択と被受容感及び被拒絶感の関係は見いだされなかった。豊田ら (2018) では、杉田 (1990) によるエゴグラムと座席選択の関係も検討したが、そこでは、上 2 席下 3 席場面において、下 3 席の右端（後述する座席 3）を選択した者は中央席（後述する座席 4）を選択した者よりも FC（Free Child ; 自由奔放な子供的自我状態）得点の低いことが示された。しかし、豊田・多根井（2018）では、大学生とともに、中年の参加者（平均年齢 47.95 歳)、高齢の参加者（平均年齢 68.21 歳）による検討も行ったが、座席選択によるエゴグラム得点の違いは見いだせなかった。ただし、そこでは座席の選択数にバラツキがあり、少ない選択数における平均の比較をしなければならなかった。そこで、本研究では座席を上 2 席と下 3 席という 2 つのカテゴリーを比較することにした。このような比較でエゴグラムに違いが見いだせるか否かを検討したのである。

これまで紹介してきた諸研究では、座席選択と、対人関係に関わる特性との関係を検討してきた。対人関係に関する心理的な特性としては、情動知能（Emotional Intelligence ; EI）が重要であるが、これまで座席選択との関係は検討されてこなかった。Law, Wong & Song（2004)によれば、これまで EI に関する多くの議論が展開され (Fineman, 1993; Mayer & Salovery,1997; Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden,& Dornheim,1998)、複数の定義が存在している。例えば, Salovey & Mayer（1990)による定義は「情動知能とは、情動を扱う個人の能力である。」というものである。そして、EI の下位能力が、自分自身や他人の感情や情動を監視する能力、これらの感じ方や情動の区別をする能力及び個人の思考や行為を導くために感じ方や情動に関する情報を利用できる能力である。この定義以降多くの定義が提出されたが、それらは微妙に異なるものであり、それぞれの定義に対応して EI を測定する尺度が数多く開発されてきた。例えば、Mayer, Caruso & Salovey (2000)は、多要因情動知能尺度を開発している。この尺度は Mayer & Salovey (1997)による EI の定義に基づいている。その定義では、EI は 1)情動を正確に評価したり、表現する能力、2)思考を促進するための感情に接近したり、その感情を生成する能力、3)情動や情動に関する知識を理解する能力及び 4)情動的、知的な成長を促すために情動を調整する能力という 4 つの能力の集合体であるとされている。同じく、Davies, Stankov & Roberts(1998)も、1)自分自身の情動の評価と表現、2)他人の情動の評価と認識、3)自分自身の情動の調整及び 4)情動の利用という 4 つの下位能力をあげている。そして、これに基づいて Wong & Law（2002）は、Wong and Law Emotional Intelligence Scale (WLEIS) を作成している。豊田・山本（2011）はこの WLEIS の日本版（以下, J-WLEIS）を開発しているが、本研究ではこの尺度を EI の測定に使用した。

本研究では、一連の研究（豊田ら, 2017, 2018 ; 多根井・豊田, 2017）が用いた仮想場面において最も座席選択による個人差を見いだしてきた上 2 席下 3 席場面を用いて、座席選択と EI の関係を検討する。Howells & Becker (1962)が指摘するように、座席選択によってリーダーシップが規定される可能性があるならば、対人関係の能力である EI も座席選択と関係していると考えられる。したがって、上 2 席のいずれかを選択した者が下 3 席のいずれかを選択した者よりもリーダーシップを反映する EI のいずれかの下位尺度得点が高くなるであろう。この予想を検討するのが、本研究の第 1 の目的である。

また、座席選択は PS の影響を受けるので、他者の存在に関して意識する特性が反映すると考えられる。大学生における心理的な特徴として、自己関連づけ傾向があげられる。金子（2000）によれば、自己関係づけ傾向とは「他者の何気ないしぐさを自己に被害的に関連づける傾向」である。このような心性は、自己関係づけが元々一般青年にお

いて認められる被害妄想的思考を被害妄想的心性として検討した金子（1999）の主張に共通するものである（豊田・濱川, 2008）。金子（1999）では、自己関係づけ傾向だけでなく、猜疑心に対応する尺度と併せて被害妄想的心性尺度として発表した。そして、金子（2000）によってこの尺度から自己関係づけ傾向に対応する項目を改訂して作成されたのが、自己関係づけ尺度である。本研究では大学生の心理的特徴である他者との行動を自分に被害妄想的に関連づける自己関連づけ傾向が座席選択に反映されるか否かを検討する。下３席の中央席を選択する者は、他者の行動をそれほど気にしないので、自己関連づけ傾向が低くなると予想した。この予想を検討するのが、本研究の第２の目的である。

北川（2003）によって、大学講義室での座席選択による学生の個人差が指摘されているが、学業成績との関連については検討されていない。また、従来の座席選択に関する一連の研究（豊田ら, 2017, 2018；多根井・豊田, 2017 豊田）でも、学業成績等の学習・認知活動との関連は検討されていなかった。上 2 席下 3 席場面においては上 2 席を選択した者がその場のリーダーになるという姿勢をもつと考えられるので、学習活動に対しても積極性であると予想できる。一方、下３席のいずれかを選択した者は、フォロアーという立場をとっており、学習活動に対してはやや消極的であると予想できる。したがって、上２席のいずれかを選択した者は、下３席のいずれかを選択した者よりも学習活動への積極性を反映して学業成績が良いと予想した。この予想を検討するのが、本研究の第３の目的である。ただし、学業成績の収集に関しては参加者の同意とともに慎重に扱う必要があるため、本研究においては人数を限定して、予備的な分析にとどめた。したがって、本研究の第３の目的は、座席選択と学業成績の関連を試験的に検討することである。

２．方　法

２．１．調査対象

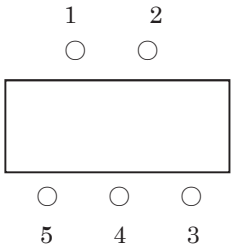
関東に位置する大学及び専門学校の学生合計 182 名が調査に協力してくれた。これらの参加者は、調査者（第２著者）の授業を受講した者であった。参加者には、調査用紙の提出は任意であり、成績とは関係ないこと、研究として結果を公表する場合があるが、個人名は特定されないことが説明された。そして、調査終了後、研究に賛同できる場合にのみ提出を求めた。なお、これらの調査対象には性及び年齢はたずねていない。

２．２．調査内容

２．２．１．仮想場面における座席の選択

豊田ら（2017, 2018）では、３つの仮想場面（①同じ専修の 12 名の友人と夕食をとるとき、②採用試験で初対面の人と集団面接をするとき、③セミナーで初対面の人とグループ討論をするとき）を設定した。したがって、調査用紙には、これらの３つの場面が印刷されている。過去の研究と統一するために３つの場面を設定したが, ②ではこれまで座席選択との関連性が見いだされておらず、①も特定の座席選択数が少なくなったので、本研究では、場面③（上 2 席下 3 席場面）に限定して、分析を行った。以下に、実際に用いた場面（Figure 1）及び調査内容を示している。

あなたは、ある教職に関するセミナーに参加し、はじめて会った人たち４名と、話し合って、一つの結論を出すように指示されました。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



数字は印刷されていない。

Figure 1 上 2 席下 3 席場面

２．２．２．EI 尺度

EI を測定するために、豊田・山本（2011）による J-WLEIS を用いた。この尺度は、情動の調節（項目例「私は、自分の気持ちをうまくコントロールできている。」）、自己の情動評価（項目例「私は、自分の気持ちを良く理解できている。」）、他者の情動評価（項目例「私は、他人を観察して、その人の気持ちをわかろうとしている。」）及び情動の利用（項目例「私は、自分でやる気を高めようとする人間である。」）という４因子による 16 項目で構成される。回答は、「全くあてはまらない（1）」「ほとんどあてはまらない（2）」「あまりあてはまらない（3）」「どちらともいえない（4）」「少しあてはまる（5）」「かなりあてはまる（6）」「非常にあてはまる（7）」の７件法であった。

２．２．３．　自己関連づけ尺度

金子（2000）による自己関係づけ尺度を用いた。この尺度は、12 項目からなり（項目例「友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる」、「話している集団と目が合うと、自分のことを言われているのではないかと気になる」、「友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある」）、評定尺度は「あてはまらない」から「あてはまる」の５件法である。

２．２．４．エゴグラムチェックリスト

本研究の目的ではないが、座席選択とエゴグラムの関係を再度確認するために、杉田（1990）から選択された項目による尺度を実施した。この尺度は、大学生が回答しにくい項目の表現を修正した簡易版である（豊田, 2003）。CP

（項目例「後輩がミスをすると、すぐにとがめますか。」）、NP（項目例「人から道を聞かれたとき、親切に教えてあげますか。」、A（項目例「感情的というよりも、理性的なほうですか。」）、FC（項目例「うれしいときや悲しいときに、顔や動作にすぐ表しますか。」）及びAC（項目例「あなたは遠慮がちで、消極的なほうですか。」）の各尺度に対応する項目が10項目ずつ、合計50項目から成っており、「はい」「いいえ」の２件法で回答するものであった。なお、原版では、「どちらでもない」という回答も含めた３件法であるが、本研究では豊田（2009）と同じく、２件法を採用した。それ故、採点は「はい」を２点、「いいえ」を０点としてカウントした。上述した尺度はそれぞれA4判の用紙に、各尺度項目及び回答評定段階に該当する数字及びアルファベットが印刷された。

２．３．調査手続き

調査者の授業において、参加者の了承を得た上で上述した仮想場面における座席の選択、EI 尺度、自己関連づけ尺度及びエゴグラムチェックリストそれぞれを印刷した用紙を配布し、集団で実施した。調査協力者が教示を与え、各項目を読み上げて調査を行った。調査終了後、提出に賛同した参加者が調査用紙を提出した。

３．結果と考察

３．１．座席ごとの選択数

豊田ら（2017, 2018）と同じく、３席の列の中心の座席（Figure1 中の座席 4）の選択率(4.94%)が他の座席の選択率（座席１が21.98%、座席２が21.98%、座席３が18.68%、座席５が32.42%）よりも少ない。両端を囲まれるという位置はPSを侵害されるために、敬遠される傾向があることが追認されたのである。また，初対面の相手であるので，リーダーシップをとることを回避するために，中心の座席を選択しなかったのかもしれない。

３．２．座席とEI

本研究の第１の目的は、座席選択とEIの関係を検討することであった。情動の調節、自己の情動評価、他者の情動評価及び情動の利用の下位尺度ごとの得点について、座席ごとの平均を算出した。その値がTable 1に示されている。これについて座席選択を参加者間要因とする１要因分散分析を行った結果、どの下位尺度においても座席選択の主効果は有意ではなく（情動の調節では $F_{(4, 177)}$ =.50、自己の情動評価では $F_{(4, 177)}$=.49、他者の情動評価では $F_{(4, 177)}$ =1.12、情動の利用では $F_{(4, 177)}$ =1.89）、座席選択によるEI得点の違いが見いだされなかった。したがって、EIは座席選択を規定する要因になる可能性は示されなかったのである。EI は自分の情動をコントロールする力を含んでいるので、PSが脅かされる座席を選択する場合にはEIが高いことが考えられるが、必ずしもそうではないことが示されたといえよう。また、EIの低い参加者は、PSが確保できる両端の座席を選択して、自分の情動のコントロールを容易にする可能性が考えられたが、それも証明されなかったのである。

３．３．座席と自己関連づけの関係

本研究の第２の目的は、大学生の心理的特徴である自己関連づけ傾向が座席選択に反映されるか否かを検討することであり、下３席の中央席（座席 4）を選択する者は、他者の行動をそれほど気にしないので、自己関連づけ傾向が低くなると予想した。Table 1に選択された座席ごとの自己関連づけ傾向の平均得点が示されている。なお、授業

Table 1　選択座席ごとのEI、自己関連づけ及びエゴグラムACの各得点

席番号	選択数		EI（J-WLEIS）				自己関連づけ n=132	エゴグラム AC	学業成績試験得点 n=41
			情動の調節	自己の情動評価	他者の情動評価	情動の利用			
1	40	*M*	15.73	19.35	18.05	15.05	35.56	10.07	75.78
		SD	6.02	5.75	5.99	6.09	15.43	5.61	17.00
2	40	*M*	16.23	18.78	17.18	14.75	29.75		n=18
		SD	6.17	6.64	5.31	5.66	13.20		
3	34	*M*	14.88	19.12	18.29	12.91	35.71	11.47	69.13
		SD	5.50	4.96	4.50	4.54	12.04	4.97	12.29
4	9	*M*	14.44	20.33	20.67	13.56	47.56		n=23
		SD	5.10	5.81	3.84	4.69	13.79		
5	59	*M*	16.29	20.29	18.85	15.86	33.56		
		SD	5.64	6.11	5.08	4.61	15.57		

展開の都合上、自己関連づけ尺度が実施できない参加者を除き、132 名を分析対象とした。1 要因の分散分析を行った結果、選択座席の主効果（$F_{(4,128)}$=2.71, p<.05）が有意であった。シェフェ法による多重比較の結果、座席 4 を選択した者の自己関連づけ得点が座席 2 のそれよりも高いことが示された（p<.05）。座席 4 を選択した者の人数が少ないこともあり、統計的に有意には至らなかったが、座席 4 を選択した者は他の座席を選択した者よりも自己関連づけ傾向が高かったのである。この結果は、予想と全く反対の結果である。自己関連づけ傾向の強い者は、他者の自分に対する否定的な行動に敏感である。否定的な行動は相手からの距離に反映されるので、距離が離れることは否定的行動であり、距離が近いことは肯定的行動と考えがちである。両方から挟まれた中心の座席に座ることをどちらかといえば肯定的にとらえて、そこに対人関係における安心を得ている可能性がある。すなわち、他者に囲まれていることを他者からの肯定的な行動ととらえれば、それが安心感を生むことが考えられる。興味深い結果であるので再度検討を行い、自己関連づけと座席 4 の間の関係が頑健なものであるか否かを確認する必要がある。

３．４．座席とエゴグラムの関係

豊田・多根井（2018）では見いだせなかった座席選択とエゴグラムの関係を上 2 席と下 3 席に分けて比較した。その結果、Table 1 の右欄に示したように、AC 得点に関しては座席位置の主効果が有意傾向であり（$F_{(1,180)}$=3.16, p<.08）、下 3 席を選択する者が上 2 席を選択する者よりも AC 得点が高いことが示された。AC とは、順応的な子供的自我状態を示すものであり、相手からの期待にしたがう傾向に類似している。したがって、Howells & Becker (1962) が上 2 席を選択する者がリーダーシップをとる可能性の高いと指摘しているので、下 3 席を選択する者はフォロアーの役割をとる可能性が高い。したがって、下 3 席を選択する者の方が相手の期待に応えようとする傾向が高い可能性がうかがえる。

３．５．座席と学業成績との関係

本研究の第 3 の目的は、座席と学業成績の関係を試験的に検討することであった。第 2 著者の授業の受講生で、個人の試験結果を分析データとして提供しても良いと承諾してくれた 41 名を分析対象とした。Table 1 の右欄には、試験得点の平均と SD が示されている。上 2 席と下 3 席の選択者における試験得点を分散分析によって比較したところ、有意な差は得られなかった（$F_{(1,39)}$＝2.11, p<.15）。本研究で学業成績として用いた試験は、第 2 著者の授業の評価として実施するもので、100 問から構成され、60 分で解答を求めるである。解答は、5 肢選択方式を採用した。本研究では、試験的に学業成績に影響する可能性を検討したが、データ数が十分ではなく統計的な確証は得られなかった。しかし、北川（2003）が示しているように、大学生の座席選択は学業成績に影響する可能性があるので、今後も学業成績等の認知的な課題に対するパフォーマンスとの関連を検討することが課題であると考えている。それが冒頭に記載した大学教育における環境を設定する手がかりとなる可能性が期待できるからである。

引用文献

Cook, M. (1970), Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, **23**, 61-76.

Davies, M., Stankov, L., & Roberts, R. D. （1998）, Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 989-1015.

Duke, M. P., & Nowicki, S., Jr. (1972), A new measure and social-learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*, **6**, 119-132.

Dykman, B. M. & Reis, H. T. (1979), Personality correlates of classroom seating position. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 346-354.

Fineman, S. (Eds) (1993), *Emotions in organizations.* London: Sage.

Frankel, A. S., & Barrett, J. (1971), Variations in personal space as a function of authoritarianism, self-esteem, and racial characteristics of a stimulus situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **37**, 95-98.

Hare, A. P. & Bales, R, F. (1963), Seating position and small group interaction. *Sociometry*, **26**, 480-486.

Howells, L. & Becker, S. (1962), Seating arrangement and leadership emergence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **64**, 148-150.

本間道子（2011), パーソナルスペース　「キイワードコレクション　社会心理学」二宮克美・子安増生（編）新曜社　176-179.

金子一史（1999), 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について　性格心理学研究,8, 12-22.

金子一史（2000), 青年期心性としての自己関係づけ　教育心理学研究, **48**, 473-480.

北川歳昭（1980), 座席行動の研究（Ⅱ）: 教室内の座席行動と性格特性　中国短期大学紀要, **11**, 32-45.

北川歳昭（2003), 教室空間における着席位置の意味　風間書房

Law, K. S, Wong, C. S., & Song, L. J. (2004), The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, **89**, 483-496.

Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. (2000), Selecting a measure of emotional intelligence: The case for ability testing. In R. Bar-On & J. D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*, pp. 320-342. San Francisco: Jossey-Bass.

Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997), What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.),

Emotional development and emotional intelligence: Educational implications. pp. 3-34. New York: Basic Book.
小俣謙二（1992), 日本人学生の座席選択にみられる特徴 名古屋文理短期大学紀要，**17**，9-16.
Rotter, J. B. (1966), Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*，**80**，1-28.
Salovey, P. , & Mayer, J. D. （1990）， Emotional intelligence. *Imagination，Cognition and Personality*，**9**, 185-211.
Schutte, N. S. , Malouff, J. M. , Hall, L. E. , Haggerty, D. J. , Cooper, J. T. , Golden, C. J. , & Dornheim, L. （1998）， Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*，**25**，167-177.
Stratton, L. O., Tekippe, D. J., & Flick, G. L. (1973), Personal space and self-concept. *Sociometry*, **36,** 424-429.
高田利武（2000), 相互独立的 - 相互協調的自己観尺度について　奈良大学総合研究所所報，**8**，145-163.
高田利武（2011), 相互独立性・相互協調性の発達的変化：青年期を中心とした縦断的検討　発達心理学研究，**22**，149-156.
渋谷昌三（1986), 教室のプロセミックス - 座席位置の分析 -　山梨医大紀要，**3**，40-49.
渋谷昌三（1990), NHK ブックス『人と人との快適距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会
Sommer, R. (1967), Small group ecology. *Psychological Bulletin*, **67**，145-152.
杉田峰康（1990), 医師･ナースのための臨床交流分析入門 医歯薬出版
杉山崇　2002　抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究　心理臨床学研究，**19**，589-597.
杉山崇　2004　他者注目と気分における被受容感･被拒絶感　日本認知心理学会第 2 回大会，2-14.
多根井重晴・豊田弘司（2017), 座席選択による相互独立的―相互協調的自己観の違い　日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集　720.
豊田弘司 (2003), 教育心理学入門 - 心理学による教育方法の充実 -　小林出版
豊田弘司（2009), 大学生における自我構造、自尊感情及び随伴経験の関係　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **19**, 1-5.
豊田弘司・濱川智子（2008），日本版 Gelotophobia 尺度（J-GELOPH）の作成　奈良教育大学紀要, **57**, 59-64.
豊田弘司・井上紗智・多根井重晴（2017), 座席位置と相互協調的－相互協調的自己観の関係　奈良教育大学紀要　**66**，23-30.
豊田弘司・村田史恵・多根井重晴（2018），座席位置と被受容感・被拒絶感及び自我構造の関係　奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **4**, 11-18.
豊田弘司・多根井重晴（2018）,座席位置における年齢差と自我構造　奈良教育大学紀要, **67**, 49-56.
豊田弘司・山本晃輔（2011），日本版 WLEIS（Won and Law Emotional Intelligence Scale)の作成 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，**20**，7-12.
Wong, C. S. , & Law, K. S. (2002), The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *Theleadership Quarterly*, **13**，243-274.